
＜書 評＞

医学博士 鈴木 哲哉 著
国療湊病院副院長 渡辺 良孝 校閲

内科医と医原病

北海道大学教授 真下 啓明

今日確かに医原病という言葉がむしろ乱用と思われるほど耳に入ってくる。その本来の意味が拡大解釈され、医療に伴うあらゆる行為に基づく病態をすべてふくめて解釈される。内科医の立場においては薬剤による問題が多いことは著者らの指摘する通りである。この意では著者らのい

う通り drug induced disease が最も重要な問題である。

本来薬物はそれが強い作用を生体に持つほど有効な薬物とされる可能性が大きく、他面副作用として現れてくる症状も強い。両刃の剣である性格がある。当然薬を投与する場合その薬物の作用は熟知し、いかなる

作用を持ち、逆にいかなる副作用の危険があるかも知らねばならない。

本書は一般内科医が日常使用する薬物を中心にそれらの作用機序、体内代謝などから薬剤の副作用を解説したものである。薬物アレルギー、抗生物質、ジキタリス、利尿剤、鎮痛薬、性ホルモン、薬物性肝炎、薬物性腎疾患など今日注目されているテーマが盛りられており、文章も平易で肩がこらずに読める。

一般内科を専門とする人々に広く一読の価値ある書であると考ええる。

A5判 頁 370 図 127 写真 2
¥ 2,500 ㇿ90

医学書院刊
